宇治拾遺物語（うじしゅういものがたり）

鎌倉時代の説話集。15 巻 15 冊。ただし，巻を立てない 2 冊本や 3 冊本もある。編者は未詳。鎌倉時代初期の成立で，1220 年(承久 2)前後と見る説が有力。書名の由来は諸説あって一定しないが，古来宇治大納言隆国(源隆国)編，またはそれに取捨を加えたものとされてきたことからの称らしく，中世には《宇治大納言物語》と異称されたこともあった。197 話の長短編説話を集録し，ひらがな本位の和文体で記した典型的な読物的説話集。雑纂形式で格別の部立はないが，説話の配列には連想による類集性も目立つ。内容は広範多岐にわたり，地域的には日本の説話を主体にインド･中国の説話を収め，話性的には仏教説話系と世俗説話系に二大別される。登場人物は帝王，貴族から武士，庶民に至る社会の全階層に及び，収載説話の分布も都鄙を選ばず，全国的規模に広がっている。主流をなすのは世俗説話系で，全体の約 3 分の 2 を占める。説話に対する興味と関心から，広く世上の奇譚珍聞を採録したもので，その内容は貴族的，懐古的趣味に根ざす和歌説話や芸能風流譚から，超階級的関心に支えられた忌間の霊怪譚や卑俗な笑話･昔話まで，世俗百般の話題を集めてきわめて多彩である。芥川竜之介が取材した巻一の〈利仁(としひと)芋粥の事〉，巻二の〈鼻長僧の事〉，巻十一の〈蔵人(くろうど)得業(とくごう)猿沢の池の竜の事〉や，《伴大納言絵巻》の詞書と同話の巻十の〈伴大納言応天門を焼く事〉，また現行昔話の古態を伝える巻一の〈鬼に瘤(こぶ)取らるる事〉，巻三の〈雀報恩の事〉などは，世俗説話中の著名なもの。一方仏教説話系は，仏法僧の霊験奇特譚や発心往生譚など，広く三宝の霊威と信仰の諸相を伝えるものが多いが，概して説教臭に乏しく，ここでも採録の基調が布教よりは説話的興味にあったことがうかがわれる。この系統に属するものとしては，《信貴山縁起絵巻》の詞書と同話の巻八の〈信濃国の聖の事〉や，昔話〈わらしべ長者〉の源流と見られる巻七の〈長谷寺参籠の男利生にあづかる事〉などが著聞する。

話性のいかんにかかわらず，総じて構成にむだがなく，表現も洗練されて，読物的説話としての完成度が高いが，わけても魅力的話題に富むのは世俗説話で，そこに展開する多彩な事件描写と，それに対処する貴賤男女の思慮と行動の叙述には人間理解の深さもうかがわれて秀逸なものが多い。《今昔物語集》《古本説話集》《古事談》などに本書収載話と同文に近い説話が多出するのも，それらが当時人気ある話題として書承されていた一証で，その意味でも本書は，編者の趣向を通じて，中世初期の時代的好尚を凝結した出色の説話集と評価することもできよう。なお中･近世を通じて比較的流布したようで，後代文学への影響も顕著なものがあった。本書のもつ笑話的性格が安楽庵策伝の《醒睡笑》以下，近世咄本の世界で珍重され，奇譚異聞的内容が浅井了意の仮名草子や，井原西鶴，都の錦などの浮世草子に素材を提供したことなどはその好例である。芥川竜之介以下の近代作家が注目したのも，多彩な話題と巧みな人間描写にひかれるところが大きかったのであろう。

今野 達 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

古事談（こじだん）

鎌倉初期の説話集。源顕兼(あきかね)編。1212 年(建暦 2)以後 15 年(建保 3)2 月までに成立。6 巻。説話を〈王道･后宮〉〈臣節〉〈僧行〉〈勇士〉〈神社〉〈仏寺〉〈亭宅〉〈諸道〉に分類集録し，その形態は中国の類書に似る。462 話収録。《中外抄》《富家語(ふけご)》《江談抄(ごうだんしょう)》《扶桑略記(ふそうりやつき)》をはじめとする諸種の先行文献の記事を抄出したものが中心となっている。説話に対しての編纂者の評語，教訓の類は付されていない。内容や分類項目からうかがえる本書の意図は，貴族社会をその裏面にまで踏みこんで描くことにあった，と思われる。説話集冒頭に称徳天皇と道鏡の好色説話を置き，花山院と馬内侍，後冷泉院と源隆国にまつわる逸話など，天皇に関する好色秘話を含むことにもその一端が示されている。《宇治拾遺物語》の編纂資料となった。また，本書の強い影響のもとに《続古事談》が成立した。

出雲路 修 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.